

コメント：

グローバル・ヒストリーにおける窪川とヴァッカーズドルフ

森田直子

日本の高知県窪川における原発計画のもみ消しと、ドイツのバイエルン州ヴァッカーズドルフにおける原子力施設反対運動は、いずれも1980年代の出来事である。前者を検討する猪瀬にせよ、後者を扱う青木にせよ、それらの出来事をその時・その場で直接に体験したわけではない。しかし、両者は、フィールドワーカーとして現地へ赴き、それぞれの出来事の当事者・関係者に話を聞きつつ、模範的な「地べたからの議論」を展開している。そこに、狭義の社会学的フィールドワークに無知・無縁の筆者がコメンテータとして呼ばれたのは、「歴史家が語ることでできる物語が、友好的な雰囲気を出すのに都合が良いと思われた」⁽¹⁾ からのかもしれない。いずれにせよ、以下では筆者が専門とする歴史学における最近の研究動向に基づき、3つの——相互に密接に関係する——論点を指摘することで、自らに与えられた役割に込めたい。

1 グローバル・ヒストリー

歴史学の最近の関心の一つは、紛れもなくグローバル化にあると言えよう⁽²⁾。グローバル化に関心を抱くのは歴史家だけではないが、近年、グローバル・ヒストリーという言葉はすっかり定着した感がある。グローバル・ヒストリーについて積極的に発信しているアジア史家の水島司によれば、グローバル・ヒストリーの「もっとも重要と思われる特徴」は、疫病・人口・生活水準などと並び、環境という新しいテーマを扱っていることだと言う⁽³⁾。原子力施設の受け入れ問題は、エネルギーや地域経済の問題であると同時に、自然や環境の問題であることは疑う余地がない。ヴァッカーズドルフについての報告は、地方—中央の権力関係にフォーカスしているように見えるが、報告者の青木の専門は環境社会学であり、人間社会と自然環境の相互作用に関心の基盤があるとみなしうる。窪川の事例は、同地の農業や漁業、とくに報告者の猪瀬自身も携わる農業が重要な軸を成しており、自然環境が原発計画と表裏一体を成すテーマとして論じられている。両者をグローバルな環境史の枠組に当てはめて考えることは十分に可能である。

(1) J・ラートカウ（海老根剛／森田直子訳）『自然と権力—環境の世界史』（みすず書房、2012年）、422頁。

(2) 例えば、以下を参照。高山博「二〇一七年の歴史学界—回顧と展望：総説」『史学雑誌』第127編第5号（2018年）、1-5頁；リン・ハント（長谷川貴彦訳）『グローバル時代の歴史学』（岩波書店、2016年）。

(3) 水島司『グローバル・ヒストリー入門』（山川出版社、2010年）、4頁。

そうなると興味深いのは、宍川とヴァッカーズドルフの同時代性であり、1979年のスリーマイル島や1986年のチェルノブイリの原発事故のインパクトである。確かに、日本の一地方における原発計画をめぐるもみ合いと、そこから9,000km以上離れた場所での原子力施設反対運動の当事者たちが、「インターネット時代」以前の当時、互いについての情報を随時得ていたとは思えない。その一方で、外国の重大な原発事故のニュースは、日本でもドイツでもかなりの影響があっただろう。ドイツにおけるチェルノブイリ原発事故の衝撃は、「ジャーマン・アングスト」という揶揄の言葉とともに良く知られており、ヴァッカーズドルフの運動にも大きな影響を与えたとされる。猪瀬も、宍川におけるチェルノブイリ原発事故の影響を指摘するが、それと同時に、「宍川の人びとにとってはソ連の原発事故よりも、その3ヶ月前にアメリカであったスペースシャトル・チャレンジャー号の爆発事故のインパクトの方が大きかったようだ」との発言もしている。これらを外的要因として型通りに捉えるだけではなく、国外からの関連情報のプレゼンスや、逆に宍川やヴァッカーズドルフの情報がどの程度まで国外に伝わり、どう受け止められたのかという点に意識的に注目することで、両事例をグローバルなコンテクストに位置づけることができるだろう。

ところで、青木はヴァッカーズドルフの事例を原子力施設反対運動として捉え、それを新しい社会運動の一翼を担う環境運動と位置づける。猪瀬は宍川の事例を社会運動という枠に押し込めることには慎重な姿勢を示すが、そのこと自体、原発計画との対峙＝環境運動、という素朴な類型化の存在を裏書きしている。上梓されたばかりの『社会運動のグローバル・ヒストリー——共鳴する人と思想——』の編著者である田中ひかるによれば、共産主義運動や労働運動などの「古い」社会運動に対し、環境・ジェンダー・教育・福祉などにかかわる運動を「新しい」社会運動として区別する見方は説得力を失いつつあるという⁽⁴⁾。その一方で、田中らが重視する社会運動のネットワークという点において、とりわけ1980年代に国境を越えてつながり始める環境運動が強調される⁽⁵⁾。日独それぞれの国内における中央-地方あるいは中心-一周縁といった構造や構造化の問題を鮮やかに示す両事例報告は、もとよりグローバル・ヒストリーへの接続の可能性を大いに秘めたものであったと言えよう。

2 長期的視点

グローバル・ヒストリーの特徴としてはさらに、扱う時間が長く、数世紀にわ

(4) 田中ひかる編『社会運動のグローバル・ヒストリー——共鳴する人と思想——』(ミネルヴァ書房, 2018年), 6-7頁。

(5) 田中『社会運動のグローバル・ヒストリー』, 12-14頁。

たる歴史動向を対象とする、ということが挙げられる⁽⁶⁾。これは、「短期主義 (short-termism)」と対置されるものであるが、この言葉について、簡単に説明をしておこう。

2014年にJ・グルディとD・アーミテイジの2人のアメリカ人歴史家が、*The History Manifesto* というタイトルの本をケンブリッジ大学出版局から出版した⁽⁷⁾。それは、PDFファイルで無料ダウンロードできる出版形態や、意見交換を促すオンライン・プラットフォームの提供などとともに、欧米の歴史家たちの間で話題となった。本書の冒頭の一文は、「妖怪がわれわれの時代をさまよっている。短期という妖怪である」となっており、最後は「万国の歴史家諸君、団結せよ！ 諸君には勝ち取るべき世界がある。遅すぎないうちに」と、締めくくられている。タイトルと合わせて、マルクスとエンゲルスの『共産党宣言』を下敷きに行っていることは明らかであろう（中身は『共産党宣言』との直接的な関係はなく、日本語訳では『これが歴史だ！』⁽⁸⁾と題されている）。本書において、「短期主義」という言葉は、数年からせいぜい数十年の短いタイムスパンでしか物事を考えられない病気 (disease) として示されている⁽⁹⁾。歴史学においても1970年代後半からこの短期主義が横行し、長期スパンの研究が忌避される傾向が顕著だったとされる。著者たちのメッセージは明快で、過去に照らして未来を考えることを使命とする歴史学にとって、短期主義は弊害が多いとする一方で、ミクロな歴史である短期分析を否定するのではなく、それとマクロな歴史、大きな物語、長期的概観とを結びつけることの重要性を説く。この点については、大半の歴史家が同意を示していると言って良いだろう。

窪川とヴァッカーズドルフについての事例報告は、一義的には、原子力施設設置計画の浮上にとまって生じたもみ合いや反対運動を分析したミクロな研究である。その計画に対して当事者たちがどのような対応を取ったのかを、短期主義的なアプローチで明らかにするものでもある。とはいえ、両報告ともに原子力施設の立地になることを回避した直接の出来事のみを扱うのではなく、その前史への目配りがあり、立地回避後の状況についての検討もなされるなど、長期的視野を想起させるシンポジウムのテーマ「脱原発を生きる——日本の模索、ドイツの模索」に見事に呼応するものであった。だが、両事例により長期の視点を持ち込むことも可能であろう。環境に関する問題は、「父祖伝来の土地の安全」や「先祖代々継承してきた生業の安定」、あるいは「子々孫々の健康や安心」といった

(6) 水島『グローバル・ヒストリー入門』, 2頁。

(7) Jo Guldi / David Armitage, *The History Manifesto*, Cambridge University Press, 2014.

(8) J・グルディ/D・アーミテイジ(平田雅博/細川道久訳)『これが歴史だ！——21世紀の歴史学宣言』(刀水書房, 2017年)。

(9) Guldi / Armitage, *The History Manifesto*, p. 2.

考え方と結びつき、自ずと世紀を超えるまなざしを持ち得るからである。とりわけ原子力施設の受け入れ問題となれば、放射性物質の半減期が示す膨大な時間、すなわち放射線（放射能）の危険性の長期的持続に対する人びとの不安が、彼らの議論や行動に少なからぬ影響を与えらると思われる。そして、この点は、次節にも大いに関係するであろう。

3 感情史

先に言及した『社会運動のグローバル・ヒストリー』の解説によると、「十九世紀以来、社会運動は個々人の非合理的な判断や感情から生まれる、という説明があった〔強調は引用者〕とされる⁽¹⁰⁾。この説明モデルに拠るならば、放射線への恐怖や不安、中央に対する地方の怒りや不満などの感情から、原子力施設への反対運動が生まれたということになる。ただし、社会運動の発生要因や特徴をめぐり多様な議論が展開されるなかで、社会運動の原因を人びとの感情（のみ）に帰する単純な解釈は説得力を失っていく。背景には、感情に関する科学研究——19世紀半ばのチャールズ・ダーウィンをその起点とみなすのが一般的である——の動向があったのかもしれない。

感情に関する科学研究は、20世紀後半に神経科学や認知科学の分野で飛躍的な発展を見せた。とりわけ1990年代以降、fMRI（機能的磁気共鳴画像法）やPET（陽電子放出断層撮影法）といった最新の技術にも支えられつつ、感情（情動行動）を引き起こす脳の仕組の解明が進み、「感情革命」が起こったとさえ言われる。その結果、例えば、我々が何となくそう信じている、理性と感情とは相対立するものであるという見方は、大きく修正された。すなわち、感情と理性的思考とは相互に関連しており、人は感情がなければ理性的な行動ができないということが明らかにされつつあるのだ。何が「理性的な行動」とされるのかは、当該社会の規範のあり方に関係するが、感情を欠いてはその社会的規範を適切に習得できないのである⁽¹¹⁾。

このように「感情」に注目が集まるなか、とくに今世紀に入ってから、欧米の歴史学界では感情史（History of Emotions）が存在感を増している⁽¹²⁾。ここでいう感情史とは、感情の理解や定義——感情という言葉で了解されるのは何か——の変遷や、個々の感情——喜怒哀楽など——の表象の変遷を明らかにするというよりは、ある歴史事象を考察する際、そこにおける感情——情動反応の経験——やその役割

(10) 田中『社会運動のグローバル・ヒストリー』、5頁。

(11) 例えば、以下を参照。A・R・ダマシオ（田中三彦訳）『デカルトの誤り——情動、理性、人間の脳』（ちくま学芸文庫、2010年）。

(12) これについては、以下を参照。森田直子「感情史を考える」『史学雑誌』第125編第3号（2016年）、39-57頁；森田直子「感情史の現在——最新の入門書を手がかりに——」『思想』1132号（2018年）、21-35頁。

に注意することで、より新しい解釈を可能にすることを旨とするものである。さまざまなアプローチが試みられているが、例えば、アメリカ人の中世史家B・ローゼンウェインは、史料に現れる「感情語」に注目し、「感情の共同体」という分析概念を提唱している。それによれば、人びとは、自らが属す共同体における振る舞いや態度、感じ方についての規範や基準を多かれ少なかれ内面化し、それに従って感情を表現するが、通常、人は複数の共同体を行き来しながら生きているという⁽¹³⁾。

窪川やヴァッカーズドルフという地方自治の共同体における模索の話は、こうした感情史的な観点からも関心を惹くものである。窪川の事例では、原発誘致をめぐる骨肉の争いを繰り広げた親戚同士が、のちの県議選に際しては一台の選挙カーに同乗するという印象的なエピソードが紹介された。彼らは地縁や血縁による共同体に属し、故郷や親族を慈しみ大切に想う感情を共有しながら、それぞれ原発推進あるいは原発反対という政治的立場による共同体にも属すことで、憎しみや怒り、戸惑いや悲しみなどの感情も持ったに違いない。上記のエピソードが生まれ得たのは、まさに複数の「感情の共同体」が存在したからであると解釈することはできないだろうか。ともあれ、猪瀬は窪川の反原発運動の要点を、異なる意見や感情を数の力で封じ込める多数決ではなく、時間をかけて「もみ合う」やり方を採ったことに見出す。このことが、人びとの感情的なしこりやわだかまりを小さくし、エピソードのような事実を可能にせしめた、と考えるのはそうおかしいことではないだろう。

ヴァッカーズドルフの事例でも、原子力施設に反対する地元民たちは、反対運動に参加する「よそ者」に対して複雑な感情——暴力行為も辞さない「カオスたち」への反感や嫌悪、彼らのせいで反対運動自体が忌避されるのではないかという不安や不満、その一方で、反対運動の同志としての共感や同情——を持った様子が浮き彫りにされた。あらゆる共同体と同じく包摂と排除の論理を伴う「感情の共同体」という観点からしても、このことは興味深く、さらなる探究の余地があることを示していよう。さらに、そこでは、身体的・物理的暴力に対峙することで、感情的な葛藤とそれに起因する行動に一層の推進力が与えられる様子も窺われた。また、ヴァッカーズドルフがドイツの原子力施設反対運動の「聖地」になり、抗議イベントのたびに各地から人びとがそこに行くもしくは集まるといった身体的な行為は、共感の生成にもつながる。こうした身体性の意義は、感情史のみならず歴史研究全般において指摘されているものである。

感情史というと、どちらかといえばマイクロな歴史叙述として想起されるかもし

(13) Barbara H. Rosenwein, *Emotional Communities in the Early Middle Ages*, Cornell University Press, 2006.

れない。確かに、感情というのは極めて個人的なものと理解され得るし、例示した「感情の共同体」にしても、ローカルな自治体や親族のつながりなど、見通しのきく集団が想定されている。しかし、アメリカ人ヨーロッパ史家のリン・ハントは、2014年の著作『グローバル時代の歴史学』において、あらゆる歴史分析の基礎となるのは社会と自己という二つのカテゴリーであると明示し、後者に関連して、感情が「歴史研究の将来性ある豊かな対象」であると指摘する⁽¹⁴⁾。つまり、感情に注目することとグローバルな視野を持つことは、決して二律背反ではないのである。

以上のコメントが、「友好的な雰囲気醸し出す」のに寄与したかどうかは定かではない。しかし、両報告において語られた物語が、グローバル・ヒストリーへの接続可能性を大いに秘めたものであるということは、明らかにし得たのではなかろうか。

(14) ハント『グローバル時代の歴史学』, 117頁。